

野哭 ニューギニア戦記

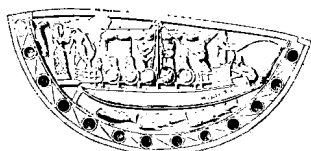
尾川 正二

創元新書 2

創元新書 21

野哭ニューギニア戦記

尾川正二著



創元社

著者略歴

1917年、朝鮮にて生まれる。

京城大学国文科卒業。広島大学研究科修了。

著書に『極限のなかの人間—極楽島の島—』

がある。

現住所 神戸市東灘区森北町4丁目13-8

野哭—ニューギニア戦記

©1972年10月20日 第1版第1刷発行

定価380円

検
止
印

著者 おがわ まさ づ
尾 川 正 三
発行者 矢 部 良 作
印刷者 寿 印 刷 K K

発行所 株式会社 創 元 社

〔530〕 大阪市北区樋上町45

電話・大阪(363) 2531 (代)

振替大阪57099

〔162〕 東京営業所 東京都新宿区山吹町77

電話・東京(269) 1051 (代)

落丁・乱丁のときはおとりかえいたします。

目次

一	原生林―ウエワク……………	三
1	光彩……………	三
2	焰……………	四
3	飛行場……………	七
4	自然人……………	一〇
5	人為の空間……………	一三
6	ニューギニア戦の「型」……………	一六
二	ニューギニア作戦の意図……………	二〇
1	第一段階……………	二二
2	第二段階 前期……………	二六

三	3	第二段階 後期	元
三		マダン行	三
1	1	行路	三
2	2	文明と自然	元
四		ゴム樹海——マダン	四
五		歓喜嶺	五
六		フィンシハーフェンの会戦	六
1	1	逆上陸	六
2	2	激突	七
3	3	壕の「生活」	七
4	4	狂気	八
七		転進	九
1	1	生命の灯	九

八

アイタペ作戦

..... 一三

2 曙の来ない「夜」..... 三

3 原自然..... 九

4 重い空間..... 一〇

5 「ほろび」の影..... 一〇

6 生命の「根」..... 一七

7 掠奪..... 二二

8 「骨」の意志..... 二四

9 友情..... 一九

九

原住民とともに

..... 一〇

1 無明..... 一四

十

2	「自然」への回帰——ヌンバフ……………	一四
3	山南の村——パンゲンブ……………	一六
	玉砕路……………	一七

十一

1	挺身攻撃隊……………	一五
2	ピアビエ・ハウス……………	一六
3	安楽死……………	一七
4	「死」の舞踏……………	一五
	終戦……………	一七

1	横と縦……………	一七
2	秘境……………	一八
3	玉砕絵巻……………	一七
4	終止符……………	一七
5	配所の月——ムツシュ島……………	二〇
6	軍司令官の遺書……………	二四
7	大酋長の運命……………	二〇
8	余波……………	二三

野哭—ニューギニア戦記

一 原生林 — ウエワク

1 光彩

無数の視線を引きずりながら、ゆっくりと北に向かっていた輸送船靖国丸が、深更の闇のなかに溶けていった。「住居」を失ったものの、空ろな空気が流れる。

突如、船は火焰につつまれた。

船が燃えだした。火災か。渚に立ち並んで、じっと凝視していたわれわれの、燃える炎にも似た眼の振動に感応した爆発か。と思ったとき、厚い雲が、金色の月を吐き出していた。恐ろしいほど清澄な月である。

微妙な角度に照らし出されて、数分間燃えつづける。みごとな造化の演出——。幻想的な火の色が、海上にゆらめく。

われわれ二〇師団七十九連隊を、この南海の果てニューギニア、ウエワクという地点に送り届けるという大任を果たしたものの後姿には、寂寥感が漂っていた。それは、無理に追い返された従順な動物の意思に似ていた。そのものさびしさが、一瞬、月の光の戯れに彩られた。

嘆賞と憧憬のかぎりをこめて、いつまでも凝視しつづける。もっとも美しいものは、また、もっとも聖なるものであるという。日常的なものから、厳粛な式典にまで高められた瞬間だった。高い生の縁に立たされ、逆に照らし出されている感じでもある。ものの数分で、もとの黒い影にかえり、天空の静けさに消えた。終わったんだな、といううずくような感懐は、われわれの始まりでもあった。

静かな視覚に映し出された眺望の彼方に隠された、それぞれの内奥は、無限に深い。追憶の書を繰ってみれば、それぞれの詩がつづられているはずである。ある決定的な断念を強いられたとき、ひとは心の底に、ある風景を定着させる。それは、心象の風景であり、消しがたい幻であり、喪失のイメージでもある。もっとも直截な、しかもトータルな情感は、放心に近い。深い沈黙が、あとを追いつづける。風は死に、くずれる一波も見えぬ空漠の海である。

2 焰

本船——舟艇——海岸——ジャングルへと、あわただしい揚陸作業。未明までに、本船靖国丸を、安全な地域に退避させなければならない。重荷をおろしてやり、解放してやらなければならない。蟻のようにたかっていた人間の力は、海岸に堆い荷物の山を築いた。重荷をふりはらった靖国丸は、一声虚空に咆えた。静かに遠ざかりゆく船を、無量の思いをこめて見送っていた。平安あれと——。そこに演出された玄妙な幻想画だった。

海岸に山積している荷物を、一物も残さずジャングルの奥に運びこんだとき、夜の帳は拭い去られていた。あらためて、「これが、ニューギニアという所なのか」「ニューギニアとは何なのか」と、あたりを見まわした。さまざまな貝殻と椰子の木だけである。波にもてあそばれている椰子の実——とにかく、みる、こと、から学んでゆくほかはないと悟った。とりあえず、いちばん近くにある椰子の木に手をおいて、挨拶をおくる。「自然」に固有の内容があふれて、表象力の及ばぬ混沌にみえる。

遠い空の深みから、黄昏が、音もなくおりてくる。夕闇が、ひとりひとりの空間をぼかし始める。過去の生涯との間におろされた幕でもある。異郷の土に立って、一切の視覚が閉ざされた。ニューギニアの第一夜である。椰子林を抜け、ジャングルの奥深く設営したのは、言うまでもなく敵機への配慮である。

急造の茅葺きの小屋に、十数人収容できる蚊帳を吊ってみても、「家」のくつろぎはこない。

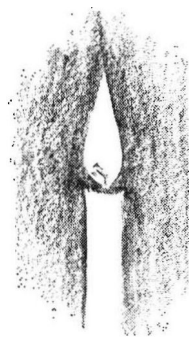
寢床をしつらえ、それぞれのねぐらにもぐりこんでみても、昨日と今日の断絶の深さに、対応のしようもない。後ろは断ち切られ、前は未だ始まらぬ不安のなかに、身を沈めている。過去から現在にいたる時間が、まるで空虚に消え去ってしまったように思われる。安心のできる意味の世界から、はみ出てしまったものの戸惑いだった。

日本から持ってきた貴重なローソクが一本、小さな空間を形づくっている。火が光となって、精一杯に闇とたたかっている。ほのかな文明の瞬きである。心の隅に、そういう小さな光のために用意された部屋があるのだろうか、ほんのりとある部分が照らし出されて快い。生命に宿っている垂直なものへの憧れが、その焰に触発されるのであろう。それが、かすかな「昨日」をつなぎとめてもいる。

節約のため、それぞれ寝る姿勢がおちついてくると、消燈となる。持ちかまえていた闇が、濃い液体となって流れ始める。闇が生きて、息づいている。

その闇の奥に光る眼がある。さらに、その奥に戦争の眼がある。二重三重の眼が、じっとこちらに注がれ、始まろうとする明日をみつめているようだ。底知れぬ沈黙のなかに、始まろうとしている何ごとかが感じられる。

しばらく、寢床のなかでのさざめきがつづく。声高なほ



ど、空語の響きがある。「大地は崩れて泥土となった」のは、単なる比喩ではない。大地も裂けた、静寂のなかに身を置くと、空語の響きに、無気味な閃光がまつわりつく。しだいに声低くなり、暗黒の流れの岸辺に沈黙してしまふ。夜の沈黙を聴き取る耳は、相對の迷路を超えて、かすかな彼方の世界の暗示に傾けられてゆくことであらう。

人体の血管図を眼の前にしているように、自分の生命が細く細く分化し、何ものかを吸いとり、吸いとられてゆくような、重苦しい夜の沈黙である。洞窟に閉じこめられた息苦しさを覚える。「夜は、おまえを母のように支えている」至福を味わいうるものは、人間は支えられているという確かな内在的原理をもつものだけであらう。

3 飛行場

草の庵を編んでの仮の宿り。われわれの、ここに駐留する真の目的・意図は明らかでない。たとえば、それが明らかにされていたとしても、戦場は、相手のあること、いつ、何事がおこるかとはわからぬ。こちらの思惑に合わせて、相手も動いてくれる筋合いのものでもない。とにかく、飛行場設定作業という当面の課題が与えられた。日限は定かでない。それと、ウエワク地区警備、四一師団の華北からの上陸を掩護する、というのが任務である。仮の宿りとわかつて

いても、「生活」への合目的な営みは、日々に加えられてゆくものである。しだいに、人間のおいを漂わせてくる。

湿った地球を思わせるほど、どこもかしこも濡れている。われわれの通る道は、その液体の膜が破れ、わずかに土らしいものの露出している部分を選び伝って、できあがったものにすぎない。ジャングルの深みは、人間の介入する余地すらない。すべて、事物の内部を究めたいという人間の本能を、弾き返すものがある。われわれは、ジャングルの周辺を、わずかに撫でまわしている存在にすぎない。「いちどきに、すべてである」自然とは、このことをいうのであらう。

薄暗いジャングルの沈黙には、あからさまな敵意すら感じられる。生命そのものの充溢と、力の持続には、生物学的な厚みだけがある。踏みこめないのだ。〈意志のあるところ、道あり〉と言ってみても、太古の沈黙の前にはねかえされてしまう。形態すらない硬質のエネルギーの氾濫である。

連日、弁当持ちで飛行場づくりに専念する。どの程度に地ならしすれば、飛び降り、飛び上がれるものなのか。木を切り倒し、地面のでこぼこをならしてゆく。一日の工程に、希望と期待をつなぐ。一月下旬から、三月中旬まで、毎日土と格闘していた。この飛行場に、ずらりと勢ぞろいする飛行機を幻想しながら。

その間、宿舎から飛行場までの道路を、トランシットをのぞきながら、正確に設定しえた。農業学校出身のタカハシ軍曹が、円い眼をいっそう円くしながら、トランシットをのぞきこみ、深刻にOKの旗を振りおろしながら、ポールを移動させていった。二百人もいれば、三メートル幅の道路の伐採は、わけもなく進捗する。冷たさを感じさせる湿ったジャングルの空気が、樹を切り倒すたびに、腐敗した落葉、苔のにおいをまき上げて、むしろ快かった。何千年という原生林に、人為をほどこしえた満足感があった。できあがった道を、いかにも道であることを確認するように、逆に歩いてみる。一キロの道を、簡単につくりあげた。「さびさびと、急ぐ道」を、ゆっくりと味わいながら宿舎に引き揚げた。

休憩の時間に、小高い丘の上に点在する、かつての民家を訪れてみる。倉皇として引き揚げたらしく、家具、調度類が、無残に散乱している。白人、華僑、およその見当はつく。外に積んである木箱に、^Holland^と印刷されているものが多く、奇異の感に打たれた。オランダから、一体何を輸入していたのか。こんな僻地にである。数世紀前の、海外雄飛の遺志は、隠然としていまも生きていたのだ。同時に、あふれる植物の樹液に拮抗する人間の生命の営みに打たれた。ここにも、あの日常の生活の営為が、ひそかに押し寄せていたということである。われわれの切りひらいた飛行場が、しかとその存在を主張しているのは、壮観だった。やがて勢ぞろいするであろう友軍機の雄姿を思い描くことに、せめてもの慰めがあった。「散兵戦

の花と散」るべき歩兵が、土方作業に明け暮れるとは、何ごとであるか。

えたいの知れない木をかつぎまわって、全身かぶれて、赤鬼の面をかぶったような分隊もあった。わけのわからぬ世界である。「いい顔になったな。ざまみろだ」と笑ってすませる余裕もあった。一木一草、悉くわれわれの理解を超える。

秩序、不敗の信念、生活の一応の安定、同じ道を歩いているもの同士の共感——そこに、安らぎがある。「今夜不知何処宿 平沙万里絶人煙」とも、「天涯一望断人腸」とも、沈黙の語らいのなかに通じ合う確かなものを、それぞれに感じ取っていたからである。

4 自 然 人

椰子林の道を、悠然と、むしろ傲然と歩いている土着の人の姿に、不思議な自然との調和を感じさせられる。色とりどりの、長い腰巻きをひるがえしながら、まさにあるべき位置を、びたりと占めている。黒褐色の膚の色、精悍な風貌、奥深い自然の暗黒が生み出した一つの「作品」に思える。ことばも、習俗も違うかれらと、意思を通じあうことが、できるものなのか。次元の違う生物同士に思えるのである。

高い樹上から、毒矢を射かけてくる、忽ち、女の振袖のように腕がはれあがり、絶命すると、